



中ノ沢こけし×ダリがコラボ!
オリジナルこけし「ヒゲこけし」販売中。

地元・中ノ沢で生まれた中ノ沢こけし(通称・たこ坊主)の工人・野矢里志さんに依頼し、ヒゲや卵をモチーフに、ダリへのオマージュを込めた愛とユーモア溢れるオリジナルこけしが生まれました。伝統と新しさが詰まったオリジナルグッズを当館ミュージアムショップでお楽しみください。

※通販は行っておりません。

※欠品中の場合もあります。予めご了承ください。



週末、モロビトレラーOPEN!
7/28・8/25マルクト朝市も開催。

美術館の玄関前広場にトレラーが登場。週末は様々なカフェなどが登場します。お楽しみに! 詳細は随時ホームページで発信します。

また、当館を会場にトレラーを囲んで【マルクト朝市】を開催。会話を通して食べ物の旬を知ったり、おいしく食べるキッチンスキルを教え合ったり…暮らしが楽しくなる朝市の開催もお楽しみに!



【マルクト朝市】開催日程

7/28(日)・8/25(日) 9:30~15:00

※マルクト朝市は入場無料(美術館の観覧は有料です)。
※天候や諸事情により内容が変更になる場合があります。

SPECIAL EVENT /

9.29(日) 9:30~17:00
入館料 無料

art food music workshop

モロビフェス

※日程や内容が変更になる場合がございます。



他にも様々なワークショップ開催。HPをご覧ください。



学びを深めるアート講座
モロ美大 第3回目
なぜダリは
モダンアートの
限界に挑むのか

2019年10月27日(日) 14:00-15:30

講師: 北山研二 氏(成城大学教授、広域芸術論)
会場: 別館アートテラス 定員: 50名※参加無料

7月13日 予約スタート ※TELまたはHP



公益財団法人
諸橋近代美術館

〒969-2701 福島県郡山市北塩原村松原字剣ヶ峯1093番23
TEL 0241-37-1088 URL <http://dali.jp>

DALImo

No.012

2019

SALVADOR DALI + MOROHASHI MUSEUM OF MODERN ART

ダリと現代アートが出会う



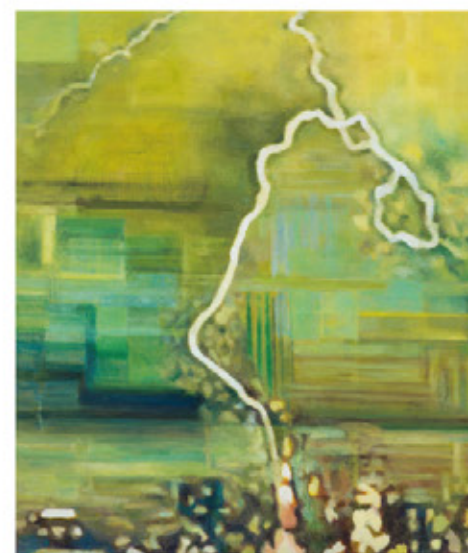
開館20周年記念展 vol.2



四次元を探しに ダリから現代へ

2019年7月13日(土)~11月24日(日) | 会期中無休 |

開館時間: 9:30-17:30(11月は17:00閉館、最終入館閉館30分前)
観覧料: 一般950円 大学・高校・専門学校生500円 中学生以下無料
※20名以上の団体料金は各50円引 ※教育施設対象の割引制度有(事前申し込み)
※身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者福祉手帳のご提示で所有者と付添者1名無料
協力: 社会福祉法人安積愛育園 はじまりの美術館



真田入つこ (riimp) 2019年 油彩、カンパナス *Masaru Yamagishi

ダリ × 11人の現代アーティスト + はじまりの美術館

20周年
出張
トーク

ダリナイト

6月4日。美術館から飛び出し、「代官山蔦屋書店」を舞台にダリナイトを開催。「四次元を探しに ダリから現代へ」の招聘アーティストでありアートディレクターとしても活躍する伊藤桂司氏と角田純氏による作品の解説や、「恋のダリ騒ぎ」と題し、アートテラー・とに〜氏とダリを愛してやまない当館学芸員・大野方子がダリトークを繰り広げた。



伊藤桂司 (Dancer) 2009年 アクリル、墨、カンワス

伊藤 (※1)：歌舞伎の見得(みえ)にヒントを得て制作した作品。シュルレアリスムは“強度な現実”という意味があるが、歌舞伎の見得にも一瞬にして現実の焦点を絞り、強度を凝縮する働きがある。動きが多い舞台上、突然止まることで得られるクローズアップの効果“動中の静”。周りから見ると止まって見えるが、役者の中では異常なエネルギー状態になっているのが“静中の動”。その静と動の行き来に興味を持って、取り組んだ作品。エナメル系の白ペンキを塗り重ねテカテカさせた中心部分が“静中の動”をイメージしたものです。

ダリ作品の密度や演出力に注目してほしい

伊藤：ダリは大きな作品でも小さな作品でも、エネルギー量が変わらない。アメリカに行って富裕層との交流から肖像画を描いているけど、空間の密度が非常に濃くて、光やバースなどの演出が素晴らしい。ダリは様々な商業デザインも手がけていますが、卓越した潜在的なプロデュース能力によって、新しい世界を広げていった感じがします。



アーティスト
伊藤桂司氏

ダリは狂か狂しい、体罰悪いとき見るときつはね(笑)。



アーティスト
角田純氏

ダリは塗りが細かい、僕からすると面倒です(笑)。



角田純 (Lemon and the ambers 03) 2016年 油彩、アクリル、紙、キャンバス

角田 (※2)：愛知県の片田舎生まれで、八丁味噌を絵にしたかったり、強い風を感じてこれを絵にしたいと思ったり…創作の原点は常にそんな所にあります。この作品はデヴィッド・ボウイが亡くなって(2016年)、久々に彼の歌を聴いたときに生まれました。最初は言葉が出てきて、その歌詞をそのまま書いてみたら、今度は具体的な植物が出てきた。その過程がシュルレアリスムっぽい、ダリっぽいと思い、「四次元を探しに」で展示したいなぁと選んだ作品です。

同時代の芸術家とは異なる魅力がダリ作品にはある

角田：作品が宗教や宇宙に行くのはダリの特徴。同じ世代を生きたマグリットやピカソにはないもので、粒子が飛んでいたり…宇宙的なものまで興味を持っていて、絵画を使って違う世界を表現しようとしている感じがします。新しさや古さを感じない普遍性がありますよね。マグリットは光の描き方が日本画っぽく、光の捉え方が柔らかいものに対して、ダリの方が南の人だからか、赤も強いし黒も強い。資質としては同じものを持っていても、生まれた場所やこの光で育ったかで変わってくるんだと思います。



アートテラー・とに〜氏

当館学芸員・大野方子

【ダリのここに惚れた】

とにかく多才

大野：もともと本人はアカデミックなことを学びたくて芸術学校に行きました。

とに〜：繊細なデッサンも描けて、画家としての基礎能力も高い。最初は王道にいたんですね。

大野：それをやったうえで“時計がぐにゃりと曲がる”あの画風にたどり着いています。

とに〜：一方で商業的な作品も制作していますよね。

大野：チュッパチャップスのロゴもダリによるものです。依頼されたレストランのその席で紙ナプキンに描いたとか。テキスタイルのデザインにロブスターの柄を入れたり、ファッション雑誌VOGUEに女性用ストッキングや香水などの広告として作品を掲載しています。

とに〜：ファッション業界にも早くから出入りするとは、今でこそ当たり前だけど当時では珍しいですね。

時代を先取り

大野：純粋芸術をやりつつ奇妙な発明品も作ろうとしていて、自分の顔を写せるピッカピカのネイルを考えたりもしています。

とに〜：今あるんですか？

大野：日本でも3年前に流行りました。それを知ったときは「時代がやっとダリに追いついた！」とガッツポーズ。当時は受け入れられませんでした。車の流線形も考えていたようです。

とに〜：インスタレーションの走りもダリ。

大野：1939年、ニューヨーク万博でバビリオンを丸々1個依頼されました。もの凄い大きな水槽を置いて上半身裸の女性を泳がせたり…周りから止められ、結局満足いくものができなかったそうです。それに腹を立てたダリは抗議文を書き、ニューヨークの空からピラをばら撒いて帰りました。

【ダリに冷めた瞬間】

コンプレックスこじらせすぎ

大野：ダリにはお兄さんがいて、ダリが生まれる前に亡くなりました。その名前がサルバドール。生涯自分は兄の代わりでしかないんだ、と思っていた節があります。

とに〜：亡くなった兄の名とは、重いものを背負っていますね。

大野：16歳の頃にはダリを非常に甘やかしたお母さんが病気で亡くなります。相当ショックだったようです。妹にお母さんの影を見て、妹に女としての役割も背負わせていたという話。

とに〜：アブノーマルな関係になってきましたね。

大野：「兄さんは私のお尻や背中ばかりを眺めて描くけど大丈夫かしら？」と妹も思っていたようです。

とに〜：マザコンでありシスコン。だいぶダリに引いてきました…

ガラを好き放題にさせる

大野：ダリがいったん有名になって稼げるようになると夫婦関係に変化が訪れます。

とに〜：ダリ自体は一途なんですよ？ガラは奔放だった？

大野：ダリがどんなにやりたがってもお金にならない仕事はやらせませんでした。仕事が終わるまでダリを部屋から一歩も出さず、自分はそのあいだ若いツパメと遊んでいたようです。ガラが幸せなら自分も幸せと言いつけていたのかなあ…

とに〜：城も買ってあげたとか。

大野：1969年「ブール城」をプレゼントします。でも、ダリはガラからの招待状がないと入れませんでした。

とに〜：奥さんの逢引のための城ですね。

大野：ダリを知れば知るほど今までになかった一面が出てきて、捕まえたかと思うと新しい一面が…沼にハマれば生涯楽しめます。

とに〜：諸橋近代美術館の近くにも「五色沼」という沼があるので、ダリの沼と自然の沼、両方楽しめそうですね。